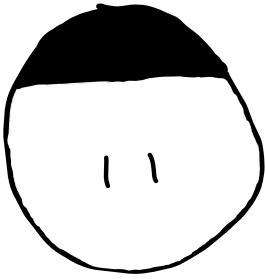
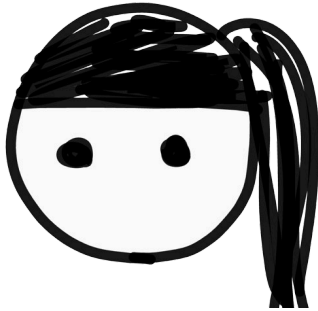


ここに出てくるキャラたち



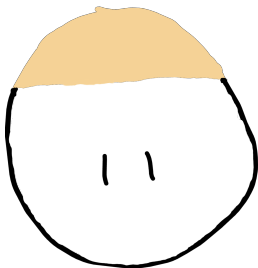
ピポ

- 性別: オス
- 特徴: 丸い体型で、シンプルな顔が特徴。上部に黒い髪。好奇心旺盛。
- 性格: 明るく元気でお調子者。



ピポポ

- 性別: メス
- 特徴: ピポに似た見た目。柔らかい輪郭と優しい笑顔。
- 性格: 穏やかで料理が得意。心配性。



ピポリン

- 性別: オス
- 特徴: シンプルな顔で黄色い髪。しっかり者。
- 性格: 冷静でみんなの支え。リーダーシップあり。ピポとピポポの息子。科学者でもある。



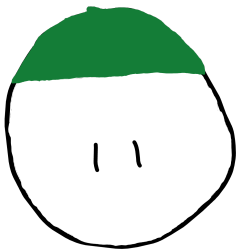
悠ピポ

- 性別: オス
- 特徴: 青い髪。ピポに似ているが落ち着いている。
- 性格: 頭が良く、みんなをまとめる役。



ピポミ

- 性別: メス
- 特徴: 黄色の髪。ピポポに似ているが表情が豊か。
- 性格: 世話好きで行動力がある。ピポリンのサポート役。



ミドピポ

- 性別: オス
- 特徴: 緑色の髪。陽気でおおらか。
- 性格: おっちょこちょいだけど一生懸命。



ミドピポポ

- 性別: メス
- 特徴: 緑色の髪。明るく元気で笑顔が素敵。
- 性格: 優しくて頼れる存在。



ミドトゲ

- 性別: オス (三つ子)
- 特徴: トゲトゲの髪型で個性的。
- 性格: 無邪気でムードメーカー。



ミドクシャ

- 性別: オス (三つ子)
- 特徴: 生まれつき寝癖のような髪型。
- 性格: おっとりしていて天然。



ミドシン

- 性別: オス (三つ子)
- 特徴: 髪型は普通で落ち着いた雰囲気。
- 性格: 思慮深くて頼れる兄貴分。

エピソード1: 緑の嵐、ピポドームに吹く！

ある日、ピポたちが暮らす巨大な家「ピポドーム」に、玄関チャイムが響いた。

「🔔👁️」 ピポは顔をぱっと輝かせて玄関に駆け寄った。

悠ピポがその後ろで少し警戒しながらも、「🚪💬？」と問いかける。

ドアを開けると、そこには見たことのないピポたちが立っていた。

「👤🌱✨」と元気よく挨拶するミドピポ。「🌿👤💖」とミドピポポもにっこり微笑んだ。

ピポポは「😊🏠🌸」と迎え入れ、ピポドームへ案内した。

そのすぐ後ろから小さな影が3つ、玄関に駆け込んてくる。

「👤🌀💚」ミドトゲが興奮気味に自己紹介。「💤😄」ミドクシャは眠たげにまばたきしながら一礼。「👤💬」とミドシンがしっかりフォローした。

ミド一家は引っ越してきたばかりで、これがご近所挨拶らしい。

ピポミがキッチンから顔を出し、「お茶でもどう？」と声をかけた。

そのとき、ミドクシャがくしゃみをした。「😷💧」




その風圧で、ピポリンの研究室から紙がひらひらと空中に舞い上がる！

「🔪📄😱」とピポリンが叫び、紙を追いかけて転げ落ちる。

ピポミは急いで手を伸ばして、「💧💧📄」と1枚をキャッチ！

「🧪👍」とピポリンが感謝を伝える。

紙も無事に回収され、緊張もほぐれてみんなで団らんタイム。

ピポは「」とゲームやスポーツの提案をし、

ミドピポポが「」とノリノリで参加。

リビングではボールが転がり、ピポとミドトゲが本気の勝負を繰り広げた。

悠ピポとミドシンはそれを冷静に観察。

ピポポとミドピポポは台所でティータイム。

ピポリンとピポミは、壊れた風で歪んだ紙の復旧に励む。

こうして、にぎやかで少しドタバタな新しい関係が始まった。




エピソード2: 三つ子のおつかい大冒険

朝のピポドーム。ミドピポとミドピポポが、三つ子に買い物メモを渡していた。

「」と任務を言い渡す。

三つ子は気合い十分。

「」とサングラスで身を固めたミドクシャ。

「」と張り切るミドトゲ。カゴ担当だ。

「」とリストを読み上げるミドシン。頭脳担当。

3人はピポマートを目指し、元気に出発！

途中、公園の前で大きな鳥に遭遇。

「」と、アメを取られたミドトゲが大騒ぎ！

「」と道に迷うミドクシャ。サングラスのせいで視界が歪んでいた。

冷静なミドシンがマップアプリを起動し、正しいルートへと導く。

ようやくピポマートに到着。

「🛒📦👍」と全員で買い物を済ませる。

帰り道、突然の小雨！

ミドクシャがレシートで雨よけを作ろうとするも、ビリビリに。

ミドシンが傘を出すも、1本だけ。

3人でぎゅうぎゅうに肩を寄せ合いながら歩く。

帰宅すると、ピポミが笑顔で出迎える。「👤👐🎉」

ピポリンはデータスキャンでミッション結果を表示。「📊🌟🌟🏆」

だが、ミドピポポが袋を開けて絶句！

「? 🧄🍞!？」

パンとレタスのはずが、パンとニンニク！？

「😄💧」とごまかすミドトゲ。

「❤️🌱? 🌱…❌🌱」と緑の葉っぱならなんでもいいと思ったミドクシャ。

「🧠💭📋🔄」と次回からはリスト確認を誓うミドシン。

ミドピポポは呆れつつも笑顔で、もう一度メモを手渡した。

エピソード3: ピポリンの発明とミドシンの秘密

夜、ピポドームの一角にあるラボでは、ピポリンが最新のガジェットを作っていた。

「🔬🧠🌟」目が真剣だ。

そこに、ミドシンがそっと訪れる。「👤💭」

「研究、手伝わせてください」

ピポリンは少し驚いたが、すぐに笑顔になって「👤👤👍」

2人でプロジェクトを進める日々が始まる。

研究テーマは「ピポ翻訳機」！ピポ語を自動で人間語に翻訳するマシン。

数日後、初試作機が完成。「🔧📢🔄」

ピポに試してもらおうと…

「👤🌞」→「こんにちは」

「🍕🤖」→「ピザロボット」

…バグ発生。

「🔪🧠💥」とピポリンが叫ぶ。笑いながらピポは「🍕🎉」と踊る。

ミドシンは「💡🔧📋」と改善策を出し、夜通しプログラミング。

その途中、彼がつぶやいた。

「…実は僕、人間に興味があるんだ」

ピポリンが聞き返すと、ミドシンは照れながら話し始める。

「みんなピポ語を自然に使ってるけど、僕はその構造にずっと疑問があった。ピポ語って、実は高度な言語体系かもしれない」

それを聞いたピポリンは目を輝かせた。「🧠💥!!」

「君は天才だよ。僕と一緒に、言語学も研究してみないか？」

ミドシンはうれしそうに「👤📋🔍」

こうして2人の新しい研究が始まった。

次のテーマは…ピポ語で詩を書く！？